



おしえの花束

雲晴

「雲 晴」第二号

平成二十四年三月一日発行

貞 林 院 瑞 正 寺

〒125-0041 東京都葛飾区東金町五-四六一五
電話(〇三三)三六二七-三四一一
FAX(〇三三)五六九九-五九一五

— 無我 —

仏教の言葉に、—無我— があります。いろいろな説明がなされますが、わかりにくい言葉です。

そこで、こう考えたらどうでしょう。

最近の親は、子どもをつくと考えています。結婚したばかりだから、まだ子どもをつくるのは早い……といったふうに。しかし、昔の人々はそうは考えませんでした。子どもはほとけさまから授かるものだと思っていました。

わたしは、昔の人々の考え方のほうがすばらしいと思います。でも、いまそれを言うのと、現代人は、授かった以上は俺のものだと所有権を主張しかねません。そこで、わたしは、

— 子どもはほとけさまからお預かりしている —

と言ったほうがよいと思います。それが、仏教者らしい考え方だと思うのです。

同時に、わたしたちの自分の生命・身体はどうでしょうか……。それはもちろん、自分のものです。法律的には、それがあたりまえです。わたしたちは、自分の生命・身体を自由にする権利を持っております。

しかし、仏教者としては、それをこう考えたほうがよいのではないのでしょうか……。

— わたしのこの生命・身体は、ほとけさまのものだ。わたしは自分の生命と身体をほとけさまからお預かりしているのだ —

わたしたちは、「ご自愛ください」といった挨拶をします。それは、ほとけさまからお預かりしている身体だから大事にしなさい……といった意味でしょう。

そう考えると、わたしたちはすべてをほとけさまからお預かりしているのです。きっと、それが「無我」の意味なのだと思います。

春の風は、大和心を動かしてくれ
ます。私たち日本人は季節の移ろい
の微妙な変化にも心を動かし、豊か
な心を育んできました。十日ほどの
短い桜の一生にも、二分咲き、二分

咲き…満開、
花吹雪、葉
桜#とその

春の香

回向院住職

本多義敬

の字の如く
#やまと#

命の瞬間に哀惜の情を持つて、
古来より和歌や俳句にもたくさん
の作品が残されています。また春にな
ると毎年報道される桜前線のニュー
スにも大和民族の季節を感じるこ

もできる心のゆとりが今も残されてい
るように思います。
日本では、多くのものに価値を見い
出す八百万の神を祀る神社と生きとし
生きるすべての仏性の存在を認める宇
宙観を持つつ仏教の寺院との融合（神仏
混淆）がありました。私たちは自身の
核なるものを大切にしながら、多様性
を尊重し、認め合い和合できる大和民
族であります。世界の紛争の多くは、

自分たちの主張する価値のみに一元
化しようとする思いから起きている
ようです。
世の中が忙しく、複雑になり、自
然の移ろいにも心を寄せるゆとりの
ない時こそ

壱の泉

落語の世界を訪ねて



「弥次郎 2」

「牛方たちがすごい形相で追いかけてくる、後ろもみずにひたすら逃げま

した。気がつくとなんとも気味の悪い山道にいます、後で分かったんです
が、恐れ山という山だそうです。」

「おう、これは名高い山だ。わたしもまだいったことがないな。」

「昼なお暗い山道をとぼとぼと歩いて」と向こうの方が急に明るくなった

んですよ。そつと近づいてみると、
相の悪い男たちが焚き火の周りに集ま
って酒盛りをしていました。」

「オイオイなんか物騒な話になってきたな。」

「ここはビビったりせず落ち着いてその男達の輪の中に入りながら懐の煙草
入れを出しまして、『率爾ながら火を
お貸しください。』という親分

らしい男が焚き火をあごで指さすんで

そこで燃えカスの火でゆっくり一服や
りました。」

「大した度胸だね。」

「一服しながら親分らしい男を睨みつ
けました。」

「ますます男らしいな。」

「いやおおきにごちそうさん・・・
と立ち去ろうとすると、『お若えのお
待ちなせい・・・』ときたので『待
てとお留めなさるのはあちきのこと
ござんすか・・・』といてやつた
んですよ。」

「今度はきみがわるいよ。」

「するとこの男が『飛んで火に入る夏の虫だ、ここは地獄の一丁目があつ

一口法話



「買かれた念仏」

「たとい余事をいとむとも、念仏を
申し申しこれをする思いをなせ」
(法然上人)

私たちの人生は生まれてから死ぬま
での一生、年の初めから大晦日までの
一年、月の初めから月末、そして朝
ら晩までの一日と大きな節目から小
な節目があり、すべては一コマ一コマ
が連続しているといえます。不連続の
連続といってもいいでしょう。

念珠の珠を日常の一コマ一コマだと
すると、その球は貫いている紐でつな
いでおかなければ散り散りになってし
まいます。日常の生活の一コマ一コマ
も念仏の信仰で繋ぎ留めておかなけれ
ばいけません。

現代人は、忙しい忙しいと心を亡く
すような生活に明け暮れています、
その現代にピッタリの念仏信仰、いつ

鎌倉時代の諸宗派

一 曹洞宗 ②

曹洞宗の名僧

道元禪師 (一一二〇～一一五三)

京都・宇治で、村上源氏の系統をひく久我通親の子として生れました。三歳で父を、八歳で母を失い、十三歳で比叡山に入り、十四歳で得度(出家)しました。その後、三井寺の公胤をたずね、そのすずめで建仁寺に至り、六年間、榮西の弟子の明全に師事しました。一二三三年に中国に渡り、如浄より中国曹洞禪を受け継ぎました。一二七一年に帰国し建仁寺にて『普勸坐禪儀』を著しました。その後深草の安養院に移り、一二三三年、興聖寺を建立し、住すること十余年、禅の挙揚と『正法眼蔵』の撰述に努めました。一二四三年、越前に移り、永平寺を建立しました。その後も修行の生活を送りながら弟子の育成に努め、一二五三年、五四歳でその生涯を閉じました。

瑩山禪師 (一二六四～一三二五)

一二六四年(一二六八年の説もある)、越前に生れ、八歳で永平寺に入り、十三歳で得度しました。三十五歳の時、大乘寺住職となり、二年後に『伝光録』を著しました。一三二一年、総持寺を開き、教団の今日的基礎をききました。一三二四年、総持寺の住職を峨山に譲り、その翌年に六二歳でその生涯を閉じました。一仏両祖 曹洞宗では道元禪師を高祖、瑩山禪師を太祖、併せて両祖とし、本尊釈迦牟尼仏とともに一仏両祖として仰いでいます。



て二丁目のないところだ、ぐだぐだ言わず身ぐるみ脱いでおいて行け』と凄んだんです。そこで『てめえらは一足二足の履物だな』といってやりました。」「なんだいそれは。」「しめて三足(山賊という洒落なんで。」「くだらないね。」「やつつけろと親分が言うとな下がみんなで襲いかかってきます。私もこれはかなわないと逃げたんですが多勢に無勢で逃げ切れないと思つたときに目の前に二間はある大きな岩、これを小脇に抱え、ちぎっては投げちぎっては投げ。」「ちよつと待ちなさい、デタラメはい

けないよ、二間の岩を抱えられるかい、それと岩がちぎれるかい。」「それが奥州名物瓢箪岩というやつで真ん中がくびれているんで、しかも出来立てだから柔らかい。」「本当かね。」「山賊からはなんとか逃げられました。すると今度はワキから二間はある大猪が現れた。わたしはひらりとうまのりになり、股ぐら探つて金玉を握りつぶして腹を割いたら子供が十六疋出てきたシシ十六で。」「オイオイ金玉があるのに子供を産んで、その猪は雄かい雌かい。」「それは畜生の浅ましき。」「



でも、どこでも、だれでも一切を如来様まかせで、南無阿弥陀仏と口称念仏すればいいのです。激しく動く現代社会の、日常の一コマ一コマを念仏信仰で貫いて下さい。念仏を申し申しの生活を貫くためにも、仏前では一心に真心こめて称名してその日その日を念仏で貫いた生活を送りたいものです。信念、姿勢、思いが大切なのではないのでしょうか。(総本山) 知恩院布教師会ホームページより)

お知らせ

寺のホームページが新しくなりましたので、どうぞご覧ください。

<http://www.teirin.com>

当山第九世然蓮社湛誉

上人の墓石が見つかる！



「墓石裏には瑞正寺九世住とある」

当山第九世の墓石が葛飾区青砥にある宝持院（真言宗）で見つかり、昨年十二月に当山歴代住職の墓地内に移設建立することができました。

湛誉上人は延享四年（一七四七年）に遷化されており、当山第九世であるとともに、地元小合村にあった信正院という寺の開山上人でもあります。

信正院は長崎奉行まで出世し、後に小合村に隠棲した松浦信正が再興した寺です。しかしその後この寺は、明治維新の際に廃寺となっています。

現在、信正の墓は宝持院にあるため、廃寺の際に開山上人の墓とともに移されたのではないかと考えられます。

廃物毀釈の際に地元の領民たちは信仰対象を散失させまいとして、信正の遺品等を当山に納めたため、信正の守り本尊であった観音像（火伏観音）や信正の木像・位牌などが現在も本堂に安置されています。

約二七〇年の時を経て信正院開山上人と明記された墓石が見つかり、信正ゆかりのこの寺に納められたことは、大変に有難いご縁だと思えます。



「松浦さまとして地元で親しまれている」



「火事除けのご利益がある火伏観音」

寺の参道に震災慰霊の

観音菩薩像を建立

昨年三月の東日本大震災により参道の観音菩薩像が倒れ破損しました。

この観音さまは、昭和五十五年本堂落慶の際に岩手県遠野市の善明寺（先代の生家）の檀家であり瓦工場を営む故沼田三次郎氏が自ら制作し、当山に寄進されたものでした。私の兄である善明寺住職に相談したところ、故沼田氏制作の観音像が一体あるということ、この度譲り受けたものです。この観音さまは白衣（びやくえ）観音と呼ばれ、高崎観音など有名です。

本年一月七日に総代世話人同席のもと入仏開眼法要を行いました。



「法類・総代世話人とともに入仏開眼」

昨年の大震災では多くの方々犠牲となられましたので、犠牲者の鎮魂と慰霊の意を込めて建立いたしました。ご来寺の際は、どうぞご本尊さまだけでなく観音さまにも手を合わせ、慰

霊とともに天災地変からお守りいただきよう、お参りください。



「白衣観音 正面のお姿」

◇浄土宗一ロメモ◇ 「宗紋と宗歌について」

浄土宗の紋は「月影杏葉（つきかげぎょうよう）」と呼ばれるものです。杏葉は法然上人の生家である漆間家の紋に由来し、これに宗歌「月かげ」の月を配したものです。檀信徒の皆様がお持ちの輪袈裟には、この紋が入っていますので上下を間違えないように注意しましょう。

宗歌の「月かげ」は法然上人がお詠みになった和歌です。



〔宗紋〕

つきかげの
いたらぬ里は
なけれど
ながむる人の
心にぞすむ

「阿弥陀さまのお救いは月あかりと同じように、あらゆる場所に届くのでお念仏を称える人は、すべて極楽浄土に往生できますよ」ということを歌われたものです。（貞林院瑞正寺）